

「別口の1,000万円」

エッセイスト 風間佳

「うちの主人はね、この間、別口で1,000万円の生命保険に入ったのよ。
その1,000万円はね、子どものためとか、生活費とかに使っちゃいけないで、
私が自立する為に使わなければいけないんですって」
とあるご婦人が言う。
どういふことなのかと聞いてみると、
「主人は私に、自分が死んだら何か習い事を始めて10年間は続けろと言うの。
どんなことでも10年習えば教えられるようになるからって言うの。
その習い事の10年間の月謝や発表会の費用が500万円で、
残りの500万円は、独立した時の教室やお店の開業費用だと言うのよ」
何となく話が見えてきた。
「主人は、自分が死んだら子どもべつたりの人生になるなって言うの。
子どもはいずれ新しい家庭を持つんだから、いつまでも一緒にはいけないんだから、
その後はどうせ独りになるんだから、
最初から独りになっても楽しく生きていけるようにしていかなきゃあダメだって。
いつまでも母親がべつたりついているようじゃあ子どもだって迷惑だって言うのよ」
なるほど、それは言っている。
「習い事を10年続けて、それで独立できて、自立できるようになれば、
私でも社会性も身に付くだろうし、知り合いや友達も増えるだろうし、
何よりも仕事が生き甲斐になるだろうからって言うのよ。
私はろくに働いた経験がないまま、すぐに主人と結婚して家に入っちゃったから、
主人はいつも、世間知らずだ、世の中を知らなすぎる、って言うの。
そんなだから、自分がいなくなった後の私のこともすごく心配しているみたい」
なるほど、なるほど、
「だから、主人がもし死ぬようなことになっても、私がちゃんと自立できるように、
生活費用とは別口で1,000万円の生命保険に入ったんですって。
私はそのお金で何とか自立しなくちゃいけないのよね。
だから、私、主人が死んだらその年から習い事を始めるのよ」

う～ん、何とも素直で無邪気なご婦人だ。
こういう女性だからご主人も心配しているのだろうなあ。
それでも、やはり、このご主人は偉いなあ。

E1A-0009-hosho